

平成二十四年度「花のまわりみち」

俳句入選句

木村 里風子 選

特選

(三句)

「二席」

はじめての桜見つめる赤子かな

亀井朝子

(評)

赤子にとって桜の花を見るのがはじめてであるが、どのように映ったか。花を見つめる赤子の思いは。何もかも初めて見る赤子は、それこそ何もかも新しく珍しいであろう。生を享けた世の中でこれから見るものは桜から始まったのか。

「二席」

花屑を踏むためらひの一步かな

山岡祥子

(評)

桜の花が散るときは一気に散り地上を花庭と化すと樹上の花より美しく、その中に哀れさもある。びっしりと散った花の中へ踏み込むのにためらうのは、散った花の美しさに畏れたのであろうか。ためらいの一語は花の美しさである。

「三席」

足弱き夫を連れ出し花の道

篠崎順子

(評)

引っ込みがちの夫をどう口説いたか、とにかく連れ出したのである。足弱い夫を庇う気の使い方が伝わってくる。連れ出したからには妻の責任が大きい。それだけに愛情も深い。

入選

(五句)

造幣の持ち場を離れ桜守

石橋康徳

(評) 作業場というか、日常の職場から観桜の客や場内の整理をするのである。期間中は桜の守りが勤務、馴れない勤めに気を使う。

嬰兒の手を打つ仕草花万朶

神波瑞江

(評) 花の美しさに親が手を打つ、真似をして手を打つのだが、その手が合わないのが可愛いのである。

快癒して鬱金桜と空の青

中植勝己

(評) 快癒という明るい気持がわかる。桜は作者に馴染み深いのであろう。再会出来たよろこびは青い空に溶け込むのである。

樽募金一円玉へ花吹雪

渡辺義昭

(評) 樽募金は東北大震災か、樽の中には一円玉が多い。樽の中には一円の外に桜が散りこんでいるのである。尊い募金樽に桜も参加したのか。

みどり児の眠りの深き花の道

井原淑子

(評) 赤子にも花疲れか、抱かれて眠る赤子は深い眠りに入っている。抱いている親はこれから疲れるのである。

佳作

(十八句)

錢造る音のまぼろし夜のさくら  
飴玉を左右の頬に花巡る  
雨に濡れさらに輝く桜かな  
桜舞ふ今年は一人まはり道  
一雨に御衣黄の蕊紅深く  
花回廊抜けて真青な空のあり  
硬貨打つ人も微笑む花桜  
たらちねの母のみやげに桜撮る  
花回廊花の数ほど人に逢ふ  
花万朶しきりに鳥の降りきたり  
仰ぎ見る御衣黄桜空に映ゆ  
試歩すこしのばさむ花の通りみち  
老夫婦肩の花びら払いあふ  
花屑をこぼし移れる鳥の影  
妻と来て話の弾む桜かな  
一筋の雲が流れて大手毬  
花冷えの母の背中に手を重ね  
老夫婦無言で見上げる遅桜

宮本 恭子  
河村 幸子  
渋谷 博文  
伊藤 哲(だんごろう)  
真部 宣則  
五石 満智子  
治武 美加  
山野 みよ子  
今永 恵美子  
大本 ミサ子(長谷美白)  
中植 紀子  
山本 定子  
野津 訓子  
正山 史明  
原田 祥二郎  
中原 恵美子  
大古 加代子  
谷口 敬誠

選者吟

鑄造の音絶え夜の桜かな

木村 里風子